株式会社 日立ソリューションズ

課題多きマスターデータ管理はどう実現するか？MDMの“最適解”を探る

様々なシステムのデータを集約し、可視化することで、新たな気づき・価値を生み出す「データ活用」はもはやビジネスに不可欠となっている。そのなかで、実は重要な役割を担うのが「マスターデータ管理（MDM）」だ。しかし、課題も多く、なかなか整備が進まない領域でもある。運用からメンテナンスまで見据えた MDM の最適解とは？

データ活用に欠かせない、マスターデータ管理の現状と課題

既存システムのデータ活用を進めるために、マーケティング基盤や統合業務システムなどを導入する企業が増えている。しかし、社員番号・顧客番号・商品番号などのマスターデータが適切に管理されていなければ、システム間でデータを紐づけることができず、データ活用も進まない。今後ますますデータ活用が注目されるなか、マスターデータ管理の重要度も高まっている。

しかし、部署ごとにデータを管理しているなど、マスターデータが統一されていない・社内に散在していて管理しきれないケースは少なくない。マスターデータを管理・連携しようにも、専用の画面・管理ツールがなく、「データベースに対してSQL文を実行し、直接更新するしかない」「そもそもデータベースがなく、Excelで管理している」などのケースも多いのが現状だ。この状況を整備し、社内のマスターデータを適切に紐づけ、いかに自動で同期するかが大きな課題となっている。

MDM（Master Data Management）について

この課題の解決策となるのがMDM（Master Data Management）だ。これは、散在するマスターデータを統合管理し、様々なシステムで活用できるよう連携する仕組みを指す。データ整形や同期などを自動化し、複数のマスターデータを紐づけ・集約することで、運用負荷の軽減とともに一貫したデータ管理を実現する。

MDMはなにか特定のツール1つで実現するのではなく、ETLツールなどを中心に仕組みを整える形が一般的だ。しかし、仕組み化すると言っても一筋縄ではいかない。データを紐づける際は、ETLツールで「どのデータをどう紐づけるか」設定するが、場合によってはデータの整形、条件に応じた細かな処理をおこなうため、スクリプトやシナリオを作成する必要がある。システム数・マスターデータの種類が増えると、スクリプトやシナリオも複雑さを増していく。これらを誰が、どうやって作成し、管理・メンテナンスするのかが次なる課題として立ちはだかるのだ。

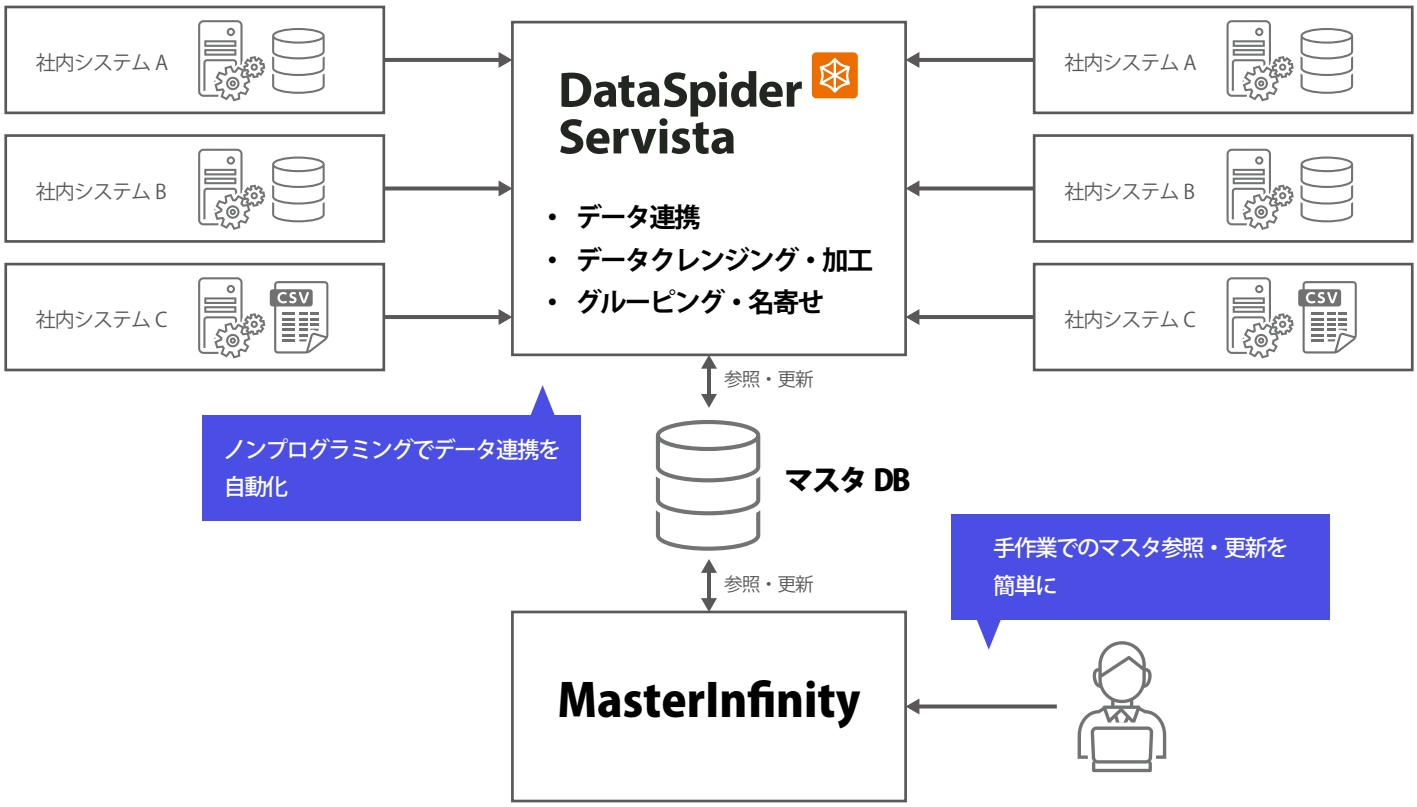
MasterInfinity＋DataSpider Servistaによる最適解

そこでお勧めしたいのが、日立ソリューションズの「MasterInfinity」とセゾン情報システムズの「DataSpider Servista」を組み合わせた構成だ。まず、DataSpider Servistaは、ETLツールに相当する機能を提供し、システム間のデータをノンプログラミングでつなぐことができる。不要なデータを省くデータクレンジングやデータの加工（整形）、グルーピング、名寄せまでGUI操作のみで実現する。Excelのデータを連携することも可能で、これにより社内に散在するマスターデータを、手間をかけずに「マスターデータベース」に集約、一元化できる。

しかし、マスターデータベースにデータが集約されても、そのままではデータの参照・更新などに専門知識が求められる。そこで有効なのが、MasterInfinityだ。データベースを参照・メンテナンスするためのWebインターフェースを提供し、誰でも簡単にマスターデータベースにアクセスできるようになる。マスターデータの集約から、その後のメンテナンスまで、まさにMDMを実現できるのだ。

さらに肝心なのが、両者の“使い分け”である。基本的に、データ連携部分はDataSpider Servistaで自動化する。もちろん複雑な条件、イレギュラーケースもスクリプトなどを作成して自動化することは可能だが、それではスクリプト管理が煩雑になる。そこで、「年1回だけ発生するイレギュラー対応」などについては、MasterInfinityを用いて手作業でデータ更新する運用とするのだ。すべてを自動化できれば理想だが、発生頻度の低いものまですべて自動化した結果、スクリプト管理に手間がかかっては本末転倒である。自動化と手作業を使い分けることで、結果的に全体としてシンプルな運用を実現できる。

さらに、すべてを作り込まずに手作業で対応する部分を確保しておくことで、柔軟さも担保する。ビジネスシーンの急激な変化にともない、求められるデータも変わっていくなかで、MasterInfinityとDataSpider Servistaの組み合わせであれば、追加開発や既存プログラムの改修をすることなく、設定変更のみで変化に対応できる。環境の変化に強いことも大きなメリットだ。



事例 スクラッチ開発不要、シンプルな運用・構成が決め手に

実際にMasterInfinityとDataSpider ServistaでMDMを実現した事例もある。ある企業では、社内外のシステムからデータを取得・整形し、マスターデータベースを構築、マーケティングなど様々な領域でデータ活用できるよう、仕組みを整えることとなった。検討の結果、MasterInfinityとDataSpider Servistaを導入したが、最大の決め手となったのが、「スクラッチ開発は不要、ローコード・ノーコードで実現できること」だった。スクラッチ開発をおこなうと、継続的なメンテナンスが不可欠で、その体制を維持するコストもかかる。これらのパッケージ製品をカスタマイズなしで導入すれば、それらの体制・コストは不要だ。シンプルな運用・構成を実現し、システム全体の維持費を下げられることが大きなポイントとなったという。

この事例ではMDMを構築したが、同様の構成で顧客情報を集約するCDP（Customer Data Platform）も実現できる。いかにデータを集約・関連付けし、活用するかが重視されるなか、様々な領域に展開できるのも強みだ。また、企業内で分散管理される様々なデータの概要（メタデータ）を自動収集・カタログ化する「HULFT DataCatalog」との連携にも注目したい。HULFT DataCatalogでは、どこにどのようなデータがあるのか分からない「データスワンプ」状態に陥らないよう、メタデータの収集・管理・検索を共通化。実業務でのデータ活用シーンにおいて、システムや元データ、利用用途などの変化にスピーディに対応できるようになる。MasterInfinity、DataSpider ServistaによるMDMと連携することで、さらなるデータ活用につながると期待される。

データ活用を進めるためには、「データをつなぐ」ことは必須だ。自動化と運用での対処をバランスよく組み合わせることで、最終的に使いやすい・メンテナンスしやすい仕組みを実現する方法は、現状での“最適解”と言えるのではないだろうか。

発行元

HULFT Move knowledge. Move markets.

株式会社セゾンテクノロジー　HPP 事務局
〒107-0052　東京都港区赤坂 1-8-1　赤坂インターシティ AIR 19F
E-Mail: hulft_partners@hulft.com

掲載ソリューションに関するお問合わせ

HITACHI Inspire the Next

株式会社 日立ソリューションズ

株式会社日立ソリューションズ
ビジネスイノベーション事業部 デジタルソリューション本部　HULFT 担当
E-mail : hulft-support@hitachi-solutions.com
Web : http://www.hitachi-solutions.co.jp/

MasterInfinity は、株式会社日立ソリューションズの登録商標です